

エッセイ 和本を調べる楽しみ 1

橋口 侯之介（誠心堂書店）

和本に目覚める

先代の田中十蔵が元気盛んだった頃、店には外から入って右側の棚に和本や拓本・法帖がたつぷり並んでいた。紺色の帙におさめられた漢籍、挟板のついた拓本、きちんと筆で書かれた札紙のついた和装本の山。古色蒼然とした光景とはまさにこのことだった。

三十年前、まだ入店間もない私には、そこは禁断の一角だった。一人で店番をしているときに、この本について顧客から何か尋ねられるのが



昭和30年代の誠心堂書店。上段が田中十蔵。下はその妻・美枝。写真の右側が和本の棚。

こわかったもので、「ニテイゼンシヨは入っているかい?」「ジンサイのコギは何かないか?」などといわれても、何のことかさっぱりわからなかった。しどろもどろに答えにもならぬ返事をして何の役にたたなかった。

ニテイゼンシヨが『二程全書』のことであり、ジンサイとは伊藤仁斎で、コギとはその著作『論語古義』や『孟子古義』のことを指しているのと知ったのは、数年後のことだ。伊藤仁斎の名は教科書程度の知識でわかったが、その具体的な著作までは知らなかった。

長澤規矩也先生がまだ存命中で、よく店にいらした。当時、国鉄のご意見番でもあったので、旅先であったエピソードをひとしきり話された後、

この棚の本を出してきては岳父と和本談義になる。若年の私には、和本のことを知らないまでも、何を話しているのかは理解できた。印象に残っているのは、同じ本でも初印、後印、修訂本とで、こんなところが違うと教えてくれたことだ。何より実物を見る大切さを認識させられたと思う。

月に一度、山口から来られた禅宗の老僧・永久ながひさがくすい岳水師も印象深い。温和なまなざしが人柄をしのばせ、名僧とはこういう人だと思った。毎回何がしかの和本を買い求められていく。同じ本を何度も買われるので、「これは先月もお買いになりましたが?」と尋ねると「ひとつとして同じ本はないのですよ」と、禅問答のようなことをおっしゃる。この意味が理解できるようになったのも、ずっと後のことだった。

店の他の棚にある洋装本にしても先代が好んで置いていた本は、戦前に

刊行された『国書刊行会叢書』とか『大日本仏教全書』、『国訳漢文大成』、『国史大系』など、いわゆるクロっぼい本ばかりだった。新人だった当初は、まずそこから覚えるのがせいじっぱいで、とても和本まで頭が回らなかった。

先代は洋装本でも、保存がよくてきれいな本だけを店に置いた。そのうえ複製本がきらいで元板でないと扱わなかった。戦後の本は、よほど評価の定まった「名著」でないと仕入れてこないの、店がシロくならない。同じ神保町のほかの店ではよく動く、いわば生きのよい本を主体とした棚ぞろえがふつうだったので、うちの店は時代遅れとも、古臭いともいえなかった。それを承知で頑固一徹な商売だったのだ。

大学で学んできたことなど、ここではほとんど通じなかったの、一から学びなおした。古本屋の修業では、本を覚えることが重要だが、それはたんに誰が、いつ出した本かという書誌的な情報では終わらない。それが売れ行きのよい本かどうか、いくらのものか、ということまで頭に入れないければ意味がない。値段そのものは、単純に需要と供給で決まっていくのだが、どこにその需要があり、どの程度供給される本なのかは、とても簡単にわからない。

本屋はよく、その本が「少ない」とか「よくある本だ」といういいかたで評価をする。この「少ない本」が重要なのだ。そこには、流通量が少ないということだけでなく、需要にくらべて供給量が相対的に少ないという

意味が含まれているからだ。逆に世間の評価は高くとも市場にあふれている本は安い。それが「よくある本」である。その機微を本ひとつひとつについて頭に入れていくのが、若い頃のわたしの「修業」だった。

そのうえ難しいのは、それが時代とともに変化していくことだ。いくら昔から古本屋のいう一級品であっても、複製が出ればおしまい。昭和四、五十年代は、その複製本のブームだった。研究動向も変わっていくので、かつて人気だったジャンルがすっかりさびれてしまうこともある。そうすると市場の相場はガクンと下がるが、安くなったと思って買い込んで、やはり売れないもので、そうした変化に対しても敏感に対応していかなければならない。流行り廃りすたにめげず、複製本が出るならそれを受け入れ、それでも売れ筋の本を追い求めていく姿勢が必要だった。

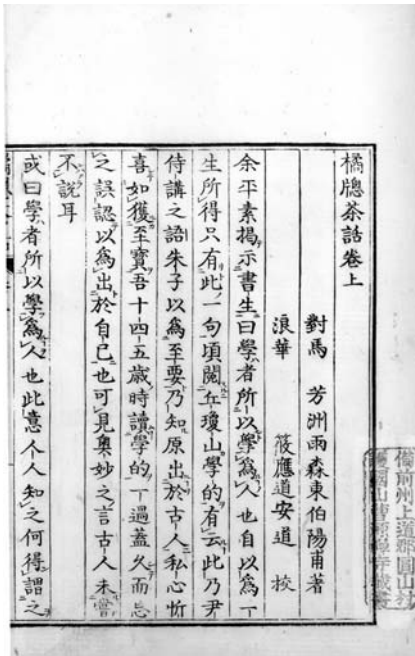
とはいえっても岳父没後に店を継いで自分でやってみると「言うは易く行は難し」で、うまく時流に乗れない。そんな格闘をしながら何とか食いつないではきたが、ようやくひとつの「発見」をした。それが和本の道である。古籍籍ということで、本が腐らない。少なくとも洋装本のようにつぶしの運命になる本はない。同じ本であっても、とくに保存がよい、とか名家の旧蔵品ということであればさらに付加価値がつく。数は多くないが、本をよく知っている安定した客層がある。ここを充実させ的確に提供できれば、やっていけるという確信が持てたのだ。

東京古典会の市場でも、何とか希望の本が買えるようになっていた。市

場に通うことは、多くの本が見られるということだ。それが知識を積み上げてくれる。先輩の買いつぶりを見ながら、そこから学ぶこともたくさんあった。ようやく自信がついてきた。

著者の表記ひとつ難し

同じ和本でも国文系統の本は、なじみもあり比較的容易に本が覚えられるのだが、本屋の人氣もあって競争が激しい。その点、漢籍は苦手の人が多いせいか競合が少なく、がんばれば参入しやすい。長澤規矩也著『和漢古書目録法』や『凶書字辞典』などを座右に置いて、せっせと目録を作った。しかしながら、その当時の記述を見ると恥ずかしい間違いがたくさんある。



雨森芳洲『橘窓茶話』の巻頭、「對馬 芳洲雨森東伯陽甫著」とある

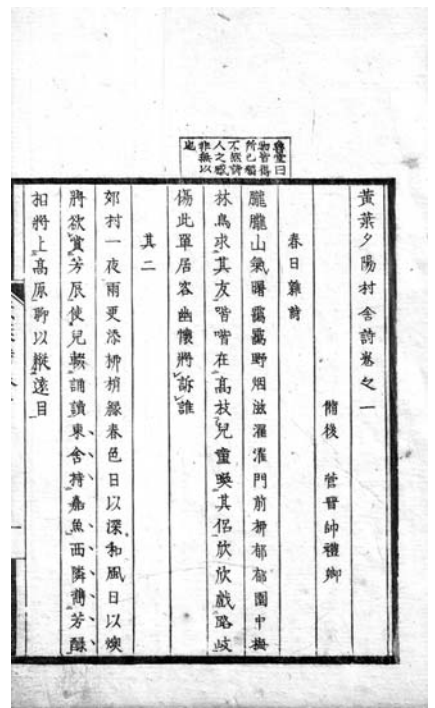
漢籍には、宋代以来といってもよい長い伝統の様式が千年続いた。この習慣にともなう知識を基本的小さいおさえておかないと満足な目録がとれない。よく知られた本なら『漢籍解題』や『中国学芸大辞典』などの文献も整っており、それを参考にすればうわべはまかなえる。しかし、漢文による日本人の著作となると必ずしも文献は整っていない。とにかく本を開いて悪戦苦闘しなければならぬ。そのひとつが著者名を調べることだった。

漢籍の著者表記では巻頭に、
きょうかん 郷貫・号・姓・名・字 あざな

の順に書くのが慣わしで、学者の書いた和文の本でもこの流儀を踏襲する。郷貫とは、出身地のことで、この本が書かれた時点での住所地ではない。中国では県名、日本では国名を書くのがふつうである。

雨森芳洲の『橘窓茶話』は、上図のように「對馬 芳洲雨森東伯陽甫著」なっていて「郷貫・号・姓・名・字」の順にならっている。しかし、間違いやすいところがある。名を「東伯」字を「陽甫」とやってしまうのである。最後の「甫」は父と同じで年長の人の、長老といった意味である。「著」とともに固有名詞ではない。したがって字は「伯陽」名が「東」である。正確なこの人の名は「俊良」「誠清」というのがあって別なのだが、著作のときは「雨森東」と中国風に三文字に修している。ついでにいうとこの人の本姓は橘氏で、橘窓という号も使う。

もつとも多いパターンが、号を入れずに「郷貫・姓・名・字」とするも



菅茶山の『黄葉夕陽村舎詩』の巻頭。
「備後 菅晋仲礼卿」となっている

ので、右の『黄葉夕陽村舎詩』の例がそれである。彦根の儒者・龍草廬の『草廬集』も巻頭は「伏水 龍公美君玉著」となっている。出身地を国名とせずに京の伏見として、姓が龍、名は公美、字が君玉である。

現在、日本人の著作の場合、学者は姓と号であらわすのが基本の著者表記である。そのため菅茶山・龍草廬というのが一般に知られた表記となるのだが、肝心の和本の巻頭ではむしろ号はめつたに出さないのだ。そのため苦労する。貝原篤信（益軒）と貝原好古を同一人物だと私は思い込んでいた時期があった。これも本に号が出ていないからである。

中国では姓と名であらわす。蘇東坡でなく蘇軾、陶淵明でなく陶潜である。それを日本にあてはめてしまうと菅晋帥や龍公美となって、誰のことかわからなくなってしまう。

その伝統があつて、日本でもさらに略していくと、姓・名だけとなる。ただし、どんなに省略されても順番は変えない。字が名の前に来るとか、

号を姓の下に置くということはしない。この原則は守られる。

一筋縄でいかないのは、姓に源平藤橘などの本姓を使う人である。新井白石が「源君美」に、荻生徂徠が「物茂卿」となるのは、本姓がそれぞれ源氏や物部氏だからである。ただし茂卿は徂徠の字である。このへんは知られていることなのだが、歴学家の中根元圭が本では「平璋」としか記されないには閉口する。本姓が平氏で名が璋である。ここから中根元圭を想像することはまったくできない。中国風の二、三文字にあえてするため（修する）姓を一字にするとこうなるのだ。

この修するため、名を一字にして雨森東、とか亀田興（鵬齋）にする場合は本姓にしないで、日本風の二字の姓をそのまま用いる。それにこだわらずに、ふつうに貝原篤信、伊藤維楨（仁齋）、ただし藤維楨と書かれることもある）、伊藤長胤（東涯）とすることもある。

神道家や国学者も字こそ使わないが、異なつた姓、さまざまな号を使うので、簡単ではない。度会延佳と出口延佳が同一人物であることを知るまで時間がかかった。

今でも、はじめて出会った本を調べるとき、まず著者名で悩むことが多い。それに対処するには、ひとつひとつ経験でカバーしていくほかはない。この永年の過程での恥の集大成が拙著『和本入門』である。そこにあなたも知ったことのように書いてあるのは、かつて私も知らないで恥ずかしい思いをしたことである。